

# 佐伯三十三観音巡り・弥生

吉田勝重

(会員 佐伯市女島)

佐伯三十三観音巡りは第六回を迎えた。今回は二十五番札所長松庵、二十六番札所如意輪庵、二十七番札所妙高庵の三カ所を訪問する事になったが、二十五番札所の長松庵は、切畑地区の洞明寺と合祀された。

二十六番札所の如意輪庵は、現在所在不明である。

畑木の西運寺にあったものか、上野地区谷口にあった大聖寺観音堂(西運寺末庵)か、栃原とちはらにあったという観音堂(西運寺末庵)か定かでない。

大聖寺観音堂は、焼失して今はないが本尊として座像があったと言われている。

二十七番札所の妙高庵は床木横谷地区の普門庵(仙床寺末庵)と考えられている。

今回の三十三観音巡りでは、それぞれ長松山洞明寺、光

台山西運寺、青松山仙床寺を訪問する事になった。

## 第二十五番札所 長松寺

御詠歌 世のきづな村も切畑いるのりの

道には障ること草もなし



現在の洞明寺とうみょうじは、延

宝元年(一六七三)久土とどの燈明寺(灯明寺)と現在地にあった長松寺が合併して中興されたという。

当時天台宗であったが明和二年(一七六三)に臨済宗に改められ養賢寺末寺となった。

寛政七年(一七九五)佐伯藩筆頭家老の戸倉重縣が文殊菩薩を作成し寄進した。

文化九年、洞明寺には新旧二十二の末庵があった。

洞明寺は文化九年百姓一揆の交渉の場でもある。



長松山洞明寺観音堂

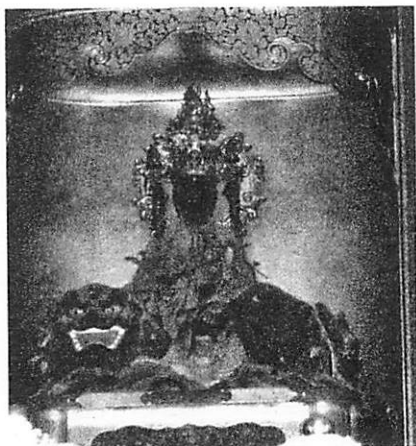


蓮華の花を持つ洞明寺観音様

洞明寺は、寛文年間の創始で元山和尚が開祖と言われている。

豊後国志には「燈明寺大同二年 所創大永中 佐伯  
惟治、命掌とうしょう禪事 慶長以降 改台教為禪寺隸妙心嘗  
有長松廢寺 遂合為一 以名其山」とある。

戸倉重県が寄進した文殊菩薩は、釈尊の入滅後、インド  
のバラモンの子に生まれた実在の人物で、菩薩の域に達  
した人と考えられている。像容はほとんどが座像で騎獅  
文殊が多い。



戸倉重縣が寄贈した文殊菩薩

文殊菩薩は右手に剣、左手に経巻や蓮華を持ち、獅子の背においた蓮華座に結跏趺坐もしくは半跏趺坐での形を示す。

この洞明寺の本堂の外には「渚葆」という扁額がかかっている。渚は「みぎわ」「なぎさ」「洲」という意味の他に、「中国の宮殿」を表すという。

また、葆は光輝くもの、守る、包み覆うという意味がある。この「渚葆」を「葆の渚」と考えれば佛の御加護の場という意味に取れないだろうか。



光台山西運寺全景

第二十六番札所 如意輪堂

御詠歌

法の道籠の露に袖ぬれて  
はるばる上の村に来にけり



西運寺の本殿：中央に阿弥陀如来が配置され、左側に観音像が見える。

二十六番札所、如意輪堂は、大正六年（一九一七）の佐伯西国三十三カ所では、所在地が山梨子とある。明治二十三年の寺院明細牒には、西運寺末庵の一つに観音堂（山梨子）が見受けられる。

しかし、現在山梨子地区に観音堂はない。大字の山梨子には谷口地区が含まれるため、谷口にあって大聖寺観音堂がそれにあたるとも考えられるが、焼失しており、何とも言えない。

西運寺は慶長六年（一六〇一）潮谷寺末寺として最初に宇藤木うとぎに創られている。寺は火災にあい焼失した。慶長八年（一六〇三）地区の熱意により、臼杵領三重、浄運寺の末寺として光譽上人により再建された。

光譽上人は、伊豫国畠城主吉松佐馬介の次子と言われている。第三世益応大徳上人の代に再び焼失した。

その結果、寺は衰微し小さな庵を営む程になった。その後の西運寺の再興は、第五世專譽上人（義天）による本堂再建、第八世微譽上人による梵鐘の鑄造、浄土宗本山知恩院の直末寺への移行、薬師堂、庫裡、本堂の瓦葺化、第十一世岌譽上人による山門の完成を経て、現在の姿となった。

寛政六年の御領分中寺社記によると、西運寺の末庵は観音堂（上野村谷口・栃原）、地藏堂（上野村上小倉・井崎・因尾村山部）、阿弥陀堂（上野村井崎・因尾村山部・日平）の八カ所があげられる。



西運寺の本尊は阿弥陀如来である。右側に脇仏として観音像が安置されていた。

この西運寺には室町時代の作と言われる涅槃図がある。

この涅槃図を前にして、西運寺和尚による説法が行われた。この涅槃図の「涅槃」という意味についてである。和尚さんの話を要約すると次のようになる。

人間には一〇八の煩惱がある。この煩惱の為に人間は怒り、悲しみ、苦しむという。



これが諸行無常の意味である、と言っている。

この煩惱を吹き消し心に悟りを得る。あるいは救いの花が咲いていく事が「悟り」であるという。

煩惱を吹き消した状態、救いの状態を「悟り」という。

悟りには、生きている内に涅槃の境地にはいる場合を「有の涅槃」死んで後に涅槃の境地に入る事を「無の涅槃」という。

この涅槃図に描かれている涅槃は、お釈迦様が生きている時に悟った「有の涅槃図」であるという。

お釈迦様は苦行すれば悟れるという考えのもと六年間修行した。しかし悟れなかった。

菩提樹の下で結跏趺坐をし瞑想している時、「この世の中で変わらないものはな

い」という考えにたどりついたという。

人間の体、人間を形作る六十兆の細胞、人の心、世の政治経済、何もかもが変わっていく。

変化しないものはない。

何によって世の中が変わるのか。これ「因縁」である。

世の中の「因縁」で善悪が生じるといふ。

諸行無常の中で「ものがあつた状態で過ぎていく。」

これが般若心経での「空」であるという。

「空」は常の状態であるという。

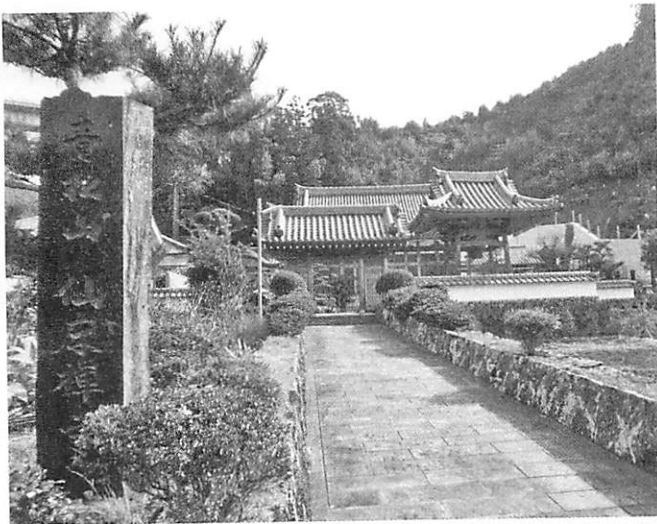
あると思うものが無くなる状況を「色即是空」。無いところから命が育っていく。花が咲く。これを「空即是色」と

言うと話されていた。

弘法大師はこれを「いろは歌」に表し広めたという。

人間は佛になる種を持つているが、人間の感情（煩惱）にふりまわされる。佛は智と力で表される。文殊菩薩の智、普賢菩薩の力などがそれである。

仏教を知るとは、永遠の命を自分で掴もうとする事であり、煩惱という雑草を取り除き、衆生とともに助け合い生きていく事、一步一步良い方向に勤めていく。これが仏教であり、涅槃への道であるという。



青松山 仙床寺全景（妙高庵は仙床寺の末庵）

第二十七番札所 妙高庵

御詠歌

奥深き床木の里の露わけて

みのりの鐘の聲に尋ねる



この仙床寺は、佐伯市史に「延宝八年（一六八〇）庄屋河野七郎兵衛が創建した。」とある。

また佐伯志には「明治村大字床木に在り。臨濟宗にして明治十五年五月允許を得て、舊の地藏庵を改め仙床寺とす。地藏庵の創始は延宝八年にあり。」とある。

二十七番札所の妙高庵は廢庵になっている。

この仙床寺の山の上の方に、普門庵と呼ばれる庵があったという。数年来より閉止されている。

荒内地区にも庵があり、別の所に移されたと言う。



明治二十三年の寺院明細帳には、仙床寺末庵として、地藏庵（元和三年・宗園）、妙光庵（元禄十一年・玄鐵）普門庵（元禄十三年・妙泉禪尼）、光林庵（宝永元年・道鏡藏主）、関照庵（享保三年・了實藏主）などがあげられている。

この仙床寺の祭壇には、二つの仏像が祀られている。二十七番妙高庵にあったという千手観音もある。

この他に、この寺には阿多古將軍地藏や御手洗南溪の書が残されている。

〈阿多古將軍地蔵〉

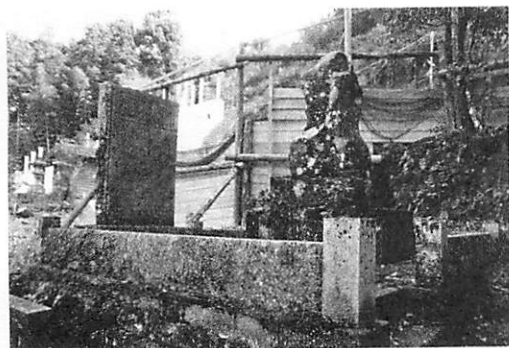


この阿多古將軍地蔵は京都の西方愛宕山に古くから祀られていたが、明治の廃佛毀釈の際、妙心寺に移され治二十年七月仙床寺に勧請されたものである。

〈御手洗南溪の碑と書〉

近代書道、鶴鳴流の第二代御手洗南溪なんげいの書が、本堂の中央、祭神の左右にある。

また境内には、南溪の記念碑とお墓がある。



弥生地区三十三観音巡りを終了後、堤内ひさかたうち

御手洗南溪は床木岡田地区に生まれ、近代書道の鳴鶴流二代目の人物である。仙床寺の右手奥にその業績を記した碑とお墓がある。

本堂の文字は、自分で書き彫ったものがあるという。

美人香草吟同契(君子と優れた家来同じ志を持つ事を喜ぶ)



高士梅花定結隣(志の良い人はお隣さんと仲良くする)



にある「軍神さま」と呼ばれ愛宕神社を訪問した。

## 愛 宕 神 社



女人禁制の山・修験者の道場として知られ  
軍神さんと親しまれた「愛宕神社本殿」

堤内の「愛宕神社」の祭神は、加具槌命とイザナギ・イザナミの三神である。

軻遇突智神は勝軍地蔵である。勝軍ということから、古くから武士の信仰を集めていたと考えられる。

この神社は、戦時中まで女人禁制の山であった。縁起には、大宝年中に役えんのおづの小角がこの地に靈感を得て開創したとある。

「軍神さん」の名が、最初に文書に出てくるのは、年号の記載は無いが「幸徳丸帆柱用に、切畑村軍陣山の杉を伐る」というものが残されている。

また、現在土曜講座で使用している古文書「明和二年乙酉御用日記」の四月二日の項に

「御船奉行長右衛門申開候 御船具山取御用ニ付在々神森二而取立申候……」

切畑村堤内軍神森二而大サ六尺廻り之杵すき本取立申候  
同所堤内天神森二而大サ五尺廻り杵本取立申候……

同所堤内天神森二而大サ五尺廻り杵本取立申候同  
所久戸軍神森二而大サ四尺八寸廻り之杵本取立申候  
……」との記載が見られる。

このように軍神さんの周辺の森は、藩の御刈山である事がわかった。

さらに、愛宕大権現宮の造営については神社の棟札に次のように書かれていた。

干時 宝暦五年（一七五五）

奉造菜 愛宕大権現宮 橋迫讚岐守

九月廿七日 大工 作右衛門

この軍神さんの入口付近に一对の灯籠がある。



それには、文化十四年丁丑歳十月吉日當村梅若（右）御寄進文化十四年丑年霜月吉日村惣中（左）の文字が見られる。



本殿内部には、仮名手本忠臣蔵の絵馬や春駒の絵、最後の特攻隊で有名な「中津留大佐の写真」や軍艦、兵の行進姿、相撲番付、鳥や花の絵図、貴族絵、和歌などの額が壁一面に奉納されていた。

当時の人々の信仰の様子が伺われる。

